

第12部会

「パラレル宗教」と完全に読み換えて訳出・表記するとしても、それが学問的に有意義な解決策かどうか即断できない。

「漢字の意味表象性と宗教学」という問題は、些細な問題にも思える。しかし、漢字学者白川静の「わが国の文化は、漢字に支えられているところが多い。ことに知的な営みの世界から漢字を除くことは、ほとんど不可能といってよい。わが国の文化的集積の大部分が、その上に築かれているからである」(『字通』一九九六年)という言葉を考えるとき、あらためて、漢字という文字媒体の意味表象力を考える必要があると思われる。学術用語の概念規定の問題を探究する際、その学術用語を生み出した文化におけるその用語の語源的探究が行われることが多い。そうであるなら、不毛な作業に陥る危険性を認識しつつ、西洋の用語を輸入し、翻訳する側の言葉⇨漢字の解析作業も行う必要があるだろう。

Th・マン文学における「敬虔」の問題

掛川 富康

①ロマン主義以来、敬虔主義は、この新しい精神と接触し、一八世紀後半から前世紀の前半期に至るまで大きな精神的勢力であった。Fr・シュライエルマッハー、S・キルケゴール、Th・マン等の、神学者、思想家、文学者の内面を深く規定し、敬虔性とロマン主義的感情との相互浸透あるいは峻別が課題として

意識された。

②所謂ウィルヘルム時代に始まるマンの文学活動は、一般に「生と精神」の対立という側面から論じられるが、しかし、マン文学の後期に至るまでの展開を視野に入れると、この対立の問題は、上記の敬虔主義とロマン主義の相互交流という、より大きな潮流の内部に位置づけられる。「生と精神」の対立のモチーフは、マン個人がその文学活動の初期において対峙したテーマであるが、マン自らになかで変容し、生と芸術が同列化され、ともに「精神」に対立するという、構図と構想における転換が図られる(『フィオレンツァ』)。

③マンの世界観の形成に大きな影響力をもったのはA・ショーペンハウアー、R・ワグナーと並んで、とりわけFr・ニーチェである。マンのニーチェ受容は、その音楽性を基調としたデイオニソス受容、つまりソクラテス主義批判の受容と、その新しい倫理の構築のプログラムに対する拒否という、二つの相反する面を持つ。マンの前者の意味でのニーチェ受容は、文化の背後にある宗教的次元の把握、及びこの宗教的次元が「敬虔」という質をもった次元と結びつけられて理解されていくことを可能とする。

④作品分析―詩歌を中心としたドイツ文学の伝統に、長編のパロディという形式を用いて対決した『大公殿下』には、敬虔性が、「大公」と対比された民衆の意識として把握され、大戦中・後の大作『魔の山』は、舞台は一九一〇年代から第一次大戦勃発時までであるが、後期中世に由来し、二〇世紀前半までのドイツ市民社会の精神的基盤の批判的分析のロマンである。

共和国精神とドイツ精神の対決という主題構成を持っているが、主人公H・カストルプの行程は、近代における敬虔主義の検証として理解できる。後期の大作『ファウストウス博士』は、同期のワシントン講演（『ドイツとドイツ人』）と実質的に並行して進められたが、そこでは、宗教的敬虔の問題は、ドイツ・ナチズムの思想的批判的検証というこの作品の中心的位置を占め、「敬虔」は中世後期以来のドイツ精神に内在する人間の「魂」の原始的性格に由来するものとして、本質的な批判を受ける。

⑤ルターの位置―(1)ルターはマンの「敬虔」の分析においてのみならず、ドイツの精神的・政治的・社会的伝統の分析において最も重要な位置を占めている。マンのルター理解の特色は、就中ニーチェのルター像に規定されていることである。ルターは、音楽の精神、ディオニュソス的なものの出現として理解され、ルネサンス（サヴォナローラ）と宗教改革（ルター）は、ある共通した力の発現として理解される。M・ウェーバー、E・トレルチらによる新しい見解には影響は受けていないようである。(2)ルターは、後期中世の都市の中にも宿り、神経症・ヒポコンデリー・ヒステリーなどに見られる、魂の未解放な、悪しき敬虔性、その原始的性格を継受している。(3)また他方、ルターは、中世の階層的な宗教秩序からの民衆の解放の実現者、グーテンベルクとともに精神の民主化の推進者とも理解されている。フランス革命はルターのこの精神の延長上に位置づけられる。

⑥ロマン主義の中に潜在し、その悪しき帰結としての魂の「原

始性」と等値された「敬虔性」に対抗して、マンが積極的な価値として位置づけようとしたのは、新しいヒューマニズム理解と世界市民主義に対する肯定である。

神道思想のパラダイム

――デルマー・ブラウンの説をめぐって――

原 真 和

村岡典嗣（一八八四―一九四六）、石田一良（一九一三―二〇〇六）、デルマー・ブラウン Delmer M. Brown（一九〇九―）は、それぞれ神道思想の本質について考察し、それを神道の三つの特質ないしパラダイムとして示している。

村岡は、「日本神道の特質―東洋思想に於ける日本の特質―」（一九三六）において、神道思想は時代ごとに多様性を示しているが、それにもかかわらず神道の定義を可能にする共通の特質があると言う。その第一は、天皇を尊ぶ皇国主義、第二は、現世を終わらなき世として肯定する現実主義、そして第三は、明浄なることを尊び、それを善しとする明浄主義である。明浄主義は神道祭祀のありよう全般によく現れている。そして、これら三つの特質は、神道の本質の発現であり、日本的なるものの主要な要素であるとする。

石田は、『日本文化史―日本の心と形』（一九八九）第八講、第三章において、村岡を踏まえた上で、「神道の原質構成の三